

人権大会で高校同期と逢うの記

市 川 清 文

『人権大会の思い出』と題するリレートークとのことですが、思い出というには生々しすぎる、今年の人権大会のことで、ひとつ。

実は、今年の人権大会に参加するに当たっての、自分の目的の1つが、旧知との再会だった。

自分は都立墨田川高校の1967年入学、学校群制度第1期生だったが、この高校の同期で弁護士になったのが3人いた。その中の1人が函館にいたことが、ずっと後で発行された卒業生名簿の職業欄で分かっていた。

名前を見ても、同じクラスになったことはなく、顔を見ても分かるかどうか分からないが、とにかく函館に事務所を構えていることが名簿で分かる。日弁連の弁護士名簿で確認すると、しっかり弁護士登録されていた。

3人の内のもう1人は、高校三年生の時に同じクラスだった椎名茂という極めてユニークな男だったが、彼が大分後に弁護士になったこと、2弁に所属したことは、実は弁護士になってずっと立ってから知ったことだった。で、彼と1度呑みたいと思って何となく調べたら、既に亡くなっていたことを知った。2弁の会報に彼の友人の弔辞が掲載されていた。ユニークな男だったので、弁護士としても型破りだったのではないかと期待していたので、がっかりした。ちょっと遅すぎたのである。

なので、もう1人の函館で弁護士をしている同期の仲間には、ぜひとも会いたいと思っていた。その高校同期の仲間の名は前田健三。顔は浮かばなくても名前だけはしっかり覚えてしまっていた。函館人権大会は絶好の機会である。

ところが、いい加減にしか見ていなかった人権大会のパンフを出発前によく見たら、何とそこに前田健三の名が記載されている。えっと思ったら、何と大会実行委員長という肩書きがついている。前田健三は、実行委員長なんだと、びっくりして、これはいよいよ御挨拶をしなければならないと思った次第。

その結果、いつも以上にわくわくして出かけた人権大会ではあったが、分科会などでは実行委員長は出てこない。懇親会の場で、千葉県弁護士会の赤い半纏を着て宣伝しながら、函館の青い半纏を着ている弁護士に前田弁護士のことを聞く。若い人でなく、年配の人が良いと思って同年配の人を捕まえて聞いてみると、ああいるよ、さっきまでここにいたなどの話。高校同期なので御挨拶をしたいのというので、探してあげるとのこと。自分も赤い半纏を着ているので、分かりやすいだろうと思いい、ちょっとうろろしていると、先ほどの年配の人が、前田弁護士に伝えたこと、

彼もあなたを探しているはずだとのこと。結局、すれ違いで互いに捕まえることができない。

こんなバカなやりとりをしている内に、懇親会も終盤となり、締め、何と実行委員長の挨拶ということになった。で、前田健三弁護士が壇上へ。ああ、あの人が前田健三弁護士かと、ようやく本人を確認できた。青い半纏を着た初老の渋い好男子が壇上で笑顔を振りまいていた。何となく、高校時代にいたことを思いだした。

実行委員長の挨拶の後、今度こそ間違いなく前田健三弁護士に近づき挨拶。千葉からの珍客に彼も驚いていた。彼がサッカー部にいたことを聞き、俄然サッカーをしていた彼の姿を思い出した（気がした）。で、自分が演劇部だったというのと、前田弁護士は、今、演劇に夢中になっているとのこと。素人劇団をもうかなり前からやっており、11月初めに公演があるとのこと。サッカー部で練習している頃は、同じ体育館で発声練習している演劇部の連中を軟弱だなんて思っていたんだけどなどと、笑っていた。

どうして函館なのかと聞くと、函館には縁もゆかりもなかったが、適当に書いた修習希望地の何番目かに当たって修習したこと、一旦は横浜で登録したが函館の魅力が忘れられずまもなく移籍したとのことだった。

人権大会は、様々な人権課題、社会問題を肴にした弁護士の特異なお祭りであるが、お祭りは共に頑張っている仲間あつての祭りである。さまざまな縁で知り合った元気な仲間達に、久しぶりに会うと、祭りも気分も最高潮である。

次の人に続く

2014年11月8日